

□□□ 今後の見通し □□□

酪農近代化計画の達成

乳牛頭数の増加に対して酪農家戸数の減少が顕著に現われ、酪農経営の規模拡大が進むという状況の中で、県では昭和五十二年を目標にした県酪農近代化計画を昨年つくりました。計画では、乳牛頭数を昨年の四倍、酪農家戸数四、五六二戸で一戸当たり平均十二・九頭、生乳生産量十六万トンを目標とし、これを達成するため、専門的な酪農経営の規模を三十頭以上として推進することとしています。また、関係市町村には、それぞれ市町村酪農近代化計画が樹立されていますので、この一連の計画が達成されるよう努力するとともに関係者のご協力を期待しています。

県外出荷基地の建設

生乳生産の立地条件に恵まれた本県においては、生乳生産の順調な伸びに反し、飲用牛乳消費の伸びが停滞気味であるので、大阪など大消費地への生乳移出

を円滑に実施することが今後の酪農振興を推進する「かなめ」となっています。

そこで、輸送距離の長距離化および輸送規模の大型化に対処するため今年度中を目標に県酪連が一日処理能力五〇キロリットルの県外出荷基地を建設し、県外への生乳移出の増大を図ることとしています。

環境保全対策

家畜飼養頭数の増加と経営規模の拡大に伴い、家畜ふん尿の排出による環境汚染の問題が発生し、今後の畜産振興の大きな阻害要因となろうとしています。

そこで、環境汚染の防止対策として畜産経営環境保全推進指導会を設け、地域の実情に応じた指導を徹底するとともに家畜ふん尿の利用および処理技術の開発ならびに施設設置に対する金融措置として、昭和四十七年度から新に畜産公害防止施設資金を設けて畜産経営の環境保全対策に対処して、今後の畜産振興を促進します。(畜産課)

△△△ 私 の 発 言 △△△

生産者の手で牛乳処理・加工を

下益城郡小川町 佐 尾 国 光

激動する現代社会にあって、農業は本当に混迷している。この背景にはいろいろな問題が山積しているようである。例えば、年中無休の割にはもうからないこと。最近非常に話題になる畜産公害、後継者問題、土地基盤整備、融資問題等数多くあるが、この難かしい酪農経営を救う道はないものかといつも思う。

ところで、今、県酪連で生乳処理問題がクローズアップされていると聞き及んでいる。これは、生産者と消費者を結ぶ良い機会ではないか。農業や抗生物質、最近では、細菌問題等、農家は顔色かえて取組み改善してきたのに、消費者に渡る牛乳はどうであろう。

他脂肪混入や、還元乳などで、利益追求に一生懸命のメーカーでは、本当に消費者がほしがっている栄養万能飲料としての牛乳は届いていないのではないかと。そこで、生産者自らの手で処理をし、加工乳でない生の牛乳を、消費者に喜ばれる牛乳を作り出したら一番いいのではないかと思う。農業県熊本だからこそこの難かしい酪農をなんとか救済発展させたいものである。行政当局の温いご指導とご援助をお願いしてやまない。

畜産公害をなくしたい

上益城郡益城町小池 村 上 幸 治

一 山に登っても、海岸においても畜産公害は問題となる。そこで牧場の現場で処理できるような施設や機械を国県の研究機関で研究して早急に畜産公害を解消できるようにして欲しい。

二 生乳処理工場建設について、県酪連では生産者の盛上がりで、建設計画を作っているのだから、時期尚早という意見も聞くが、十数年前より私達はこの時期を待っていた。この期を逸せず、県の強力な指導と助成をお願いし早急に工場が完成することが、熊本県酪農の発展の唯一の道と思う。

三 現在の酪農は、人と牛と草と機械の四つを合理的に組合せ、高率化せねばならぬと思う。特に機械使用についての技術面、管理面の指導をお願いする。

四 育成農家が非常に少なくなり、従って他県よりの導入が非常に多く、運賃などの経費で乳牛の価格が高値になった。酪農家は牛不足で悩んでいる。そこで、現在大部分の農家に貴重な納屋と庭が遊んでいるのを利用して、乳牛の育成をするように指導してもらえば双方よいと思う。

五 現在の酪農の問題点は、繁殖障害と乳房炎である。この対策指導をお願いする。新聞に記載してもらおうことが、末端農家の普及には一番早いと思う。

六 後継者づくりは経営者づくりである。現在は何千万円の資本で経営をやる。それで実習も半年や一年では短かい。その位では本当にまかせられない。五、六頭の酪農で鎌で草を刈る時はよかつたかも知れないが、これからの酪農は企業と同じである。例えばスシ店、大工、洋服店でも一年の見習いで独立できるだろうか。そこで実習受け入れ農家も相当の給料を支払い、両立するようにして堅実な経営者を育てなければならぬと思う。

消費者との対話も

下益城郡松橋町浅川 緒 方 保 幸

飲用牛乳の消費が減り始めた。これは酪農関係者にとって一大事であると同時に、国家的にも大変なことである。国民の体位向上の面からも、これは栄養のバランスのとれた食品はないと思うが、それにもかかわらず、生産農家戸数が減少し、消費量も減るといのはどうしたわけか。

その理由と思われるものを、いくつかあげてみると、①酪農は労多くして、報いが少ない。しかも、資本は多く必要である。②多頭化しなければ、経営は成立たないし、多頭化すれば、畜産公害が発生しやすい。

以上は、いわば生産者側の内輪の事情で、努力をすれば自分の力で何とかできる問題ではある。

原因の③、BHC、抗生物質の排除には生産者も協力し、乳質の向上に努めたが、大手メーカーが、インチキの異種脂肪を混入して、牛乳のイメージをダウンさせ、消費減の一因をつくった。④生産者の牛乳脂肪は、三・二%と規定され、われわれは、それで取りきしているが、メーカーの市販牛乳の脂肪は、三・〇%という基準になっているのはおかしい。

そこで、私が主張したいことは、流通機構を改善し、本物牛乳・うまい牛乳を産地からの直送で消費者のもとへ送りたい。消費者の皆さんとは、生産の現場を見てもいいながら、相互理解のための対話の場を持ちたい。その実現のために、国も県も力を入れて欲しいと思う。

トピックス

熊本種雄牛センターの完成

優秀な乳用牛の改良を図るため、九州一円の乳用牛めす頭数十一万六千六百頭を対象にした種雄牛センターが去る五月に阿蘇郡西原村の県営西原公共育成牧場の一角に完成しました。このセンターは、乳用種の雄牛三十三頭を収容し、その種雄牛から採取した精液をマイナス百九十六度で凍結処理し、人工授精用に供するものであり、全国で二番目に完成したものです。

活躍するミルクスケールローリー

大規模な酪農経営になりますと、搾乳と生乳の出荷に多くの時間がかかります。このうち、搾乳はパイプライン方式で省力化されましたが、集乳と出荷が問題となっていました。

そこで、四十六年度の補助事業として、球磨地域の部落単位に冷却施設（バルククーラー）を設置し、ミルクスケールローリー（計量器付のタンクローリー車）による集乳を、ことしの四月から実験的に始めました。

その結果、農家からの出荷時間が短縮され、冷却されたままの生乳を工場へ輸送できるようにになり、乳質保持の点から好成績を収めています。



完成した種雄牛センター